ねに排除されていった。ヨソの死者はそのままヨソの死者として無視され、あるいは隠蔽されたといったほうがいいだろう。蛇足ながら付け加えると、著者のいう二人称の死者をミウチの死者、三人称の死者をウチの死者と、内部をミウチとウチの二重構造とし、無視されを排除される外部の死者をヨソの死者として、三重の構造によってとらえるなら、敵国などの死者が不可視にされた歴史的なプロセス、侵略戦争を遂行したにもかかわらず、「加害者性」が現われてこない「歴史認識」のあり様も明るみに出すことができるのではなからうか。

やや手前勝手な論評を行なってきたが、これも本書のすばらしさに触発されたからに他ならない。著者に感謝するとともに、今後の発展を期したい。

大貫 隆著

『イエスの時』

岩波書店 二〇〇六年五月二三日刊
四六判 ⅩⅩ十二九二頁十一五頁 二九〇〇円十税

土 井 健 司

キリスト教の端緒に位置付けられるナザレのイエスを中心に、イエス以前のユダヤ教黙示文学、そしてイエス後のパウロの時間論を解釈したものが本書である。なかでもイエスの部分は前著『イエスという経験』をめぐって提示されたさまざまな論評、批判に触発されて書かれ、多分に応答的な内容になっている。なお『イエスという経験』へ言及される箇所では引用とともに必要な説明がなされているので、前著を引かずとも理解できるよう配慮されている。そして分量として本書の半分を占めるのは、前著では扱われていないパウロに関する論述である。その意味でもイエス解釈に徹した前著の続編だと言える。まずは全体の目次を書き出してみたい。

第一部 救済史を超えて——旧約聖書・ユダヤ教黙示思想との対話

第I章 「モーセ五書」と「申命記史書」におけるアブラハムとモーセ

書評と紹介

- 一 二つの歴史記述の接合の問題
 - 二 「九書」の歴史物語の最上位の枠組みとしての「アブラハムへの約束」
- 第II章 ユダヤ教黙示思想におけるアブラハムとモーセ
- 一 ユダヤ教黙示思想の主要テーマと類型区分
 - 二 モーセ契約の破綻
 - 三 アブラハム契約の存続
 - 四 「残りの者」とメシア待望
- まとめ——ユダヤ教黙示思想の時間論
- 第III章 洗礼者ヨハネ
- 一 アブラハム伝承との訣別
 - 二 洗礼者ヨハネと「神の国」
- 第二部 イエスの「内側から」と「外側から」——イエス研究の視座
- 第IV章 イエスとアブラハム伝承
- 一 「神の国」のイメージ・ネットワークとアブラハム
 - 二 イエスのイメージ・ネットワークの構成要素と独自性
 - 三 イエスとモーセ伝承
- 第V章 イエス研究の視座
- 一 イメージ・ネットワークの方法論的有効性
 - 二 文学社会学について
- 第VI章 「謎の死」としての十字架
- 一 「謎の死」と「覚悟の死」
 - 二 イエスの「内側」と「外側」、キリスト教信仰の「内側」と「外側」
- 三 再びイエスの沈黙と絶叫について——非神話化への臨界
- 第三部パウロとイエス——現代思想との対話
- 第七章 原始エルサレム教会の復活信仰と贖罪信仰
- 一 復活信仰の成立をめぐる問題
 - 二 「贖罪信仰」をめぐる問題
 - 三 原始エルサレム教会の贖罪信仰の論理
 - 四 原始エルサレム教会の贖罪信仰の問題点
- 第八章 パウロの「十字架の神学」
- 一 「死」と「十字架」の違い
 - 二 根源的な「罪」(単数)とパウロの回心
 - 三 パウロの律法論
 - 四 パウロの「苦難の神学」
- 第九章 パウロの「今」——パウロの時間論1
- 一 「今」、「今この時」
 - 二 現在完了形
- まとめ
- 第十章 パウロとベンヤミン
- 一 パウロのテュポス論——パウロの時間論2
 - 二 G・アガンベンのテュポス論とW・ベンヤミン
 - 三 パウロの終末待望——パウロの時間論3
 - 四 ベンヤミンにとつてのパウロ
- 第十一章 ベンヤミンとイエス
- 一 普遍史と未来
 - 二 形象の星座としての理念(真理)

三 「現在時」

四 イエスの「神の国」とベンヤミン

五 遅れてくる経験

丁寧に構成された目次である。ここでは下位のアラビア数字で表示されている項目は割愛したが、これも含めるなら、目次を一瞥するだけでもおおよその内容は掴めるよう工夫されている。またその筆致は、著者の積年の研究を背景に力強く、また曇りなく展開する。全体は三部から成り、第一部がユダヤ教黙示思想、第二部がイエス、さらに第三部はパウロの時間論に割かれている。いずれも「時」というものを主題とするが、イエスの「全時的今」を中心に展開する。最初のユダヤ教黙示思想の箇所では、モーセ伝承とアブラハム伝承の比較を通してアブラハム伝承の優位性が論じられ、イエスのイメージ・ネットワークに占める「アブラハム」への連続と不連続が確認される。またイエスの「全時的今」と比べられたパウロの時間論（十字架を起点とする「すでに」と終末への視線をもとにした「いまだ」の緊張関係）のところできくに興味深いのは、アガンベンやベンヤミンといった現代思想との比較が展開されていることである。ベンヤミンのメシア論とパウロの関係、またその「イメージ（形象）」の「星座的布置関係」とイエスのイメージ・ネットワークとの類似などの議論は、現代思想としてイエスやパウロを理解する可能性を開いたものであろう。この点二五六頁に見られる日本のベンヤミン研究者への批判についてどのような応答があるのか、評者には興味深い。

さて、本書全体の分量から見ればいささか偏っているのだが、それでも書名が示しているように、本書の中心にあるイエスに関する解釈について若干の私見を述べてみたい。

本書のなかで「私にとって大きな転換となったのは、他でもない、これまでの研究においてスキップされ、言わばブラックホール化していた言葉あるいは記事のほとんどが、一つのイメージのネットワークに収斂することを発見したことであった」（九九頁）と語られているが、福音書に記される、教会的にも神学的にも今日意味を確認できないでいるイエスに関わる幾つかの記事の中に統一したイメージ・ネットワークを認め、これを「全時的今」として捉えること、具体的にはサタンが墜落して天が晴れ上がり、アブラハムをはじめとする義人たちが天で祝宴をするという過去と未来とが一つになる「今」のビジョンの下で、「アツバ父なる神」への信頼をもってなされた宣教活動、および晩年のエルサレムへの上京とその結末としてイエス自身にとつての謎の刑死、おおよそ著者のイエス解釈はこのようにまとめられる。独創的であるのは、マックス・ウェーバーの理解社会学の「内的動機付けのプロセス」に触発されて「史的イエス」をイエスの「内側」を照射する仕方で見え、その内実として上述のイメージ・ネットワークを描き、また十字架における「謎の死」という解釈を導き出していることであろう。イメージ・ネットワークから見ると十字架の刑死は、このイメージ内に収まらないものであって、イエスにとつて「謎の死」ということになる。

イエスの「内側」における「謎の死」とは、マルコ伝とマタ

書評と紹介

イ伝における「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか）などに描かれていたイエスの絶叫に拠るが、イエスは絶望と信頼の臨界において謎のまま殺害されたという。前著によると、イエスの死は「覚悟の死」ではなく、単なる「絶望の死」でもなく、神への問いかけであつたという（二二五頁）。本書ではこの点をさらに述べて、「それは絶望と信頼のギリギリの境界線上の問い、言わば「ヨブの問い」である」（一一六頁）とする。著者の論述は「覚悟の死」を批判することで限りなく絶望に近いことを強調するのだが、絶望ではなく臨界と述べている。確かにイエスが絶望の叫びを発したといつても、本当に絶望したのであれば最早叫ぶことはないだろう。「叫ぶ」という行為はドラマティックではあつても、心底の絶望とは異なる。ヨブの叫びと同様に、そこには臨界に達してもひとかけらの信頼が認められる。その意味でキリスト教信仰における「覚悟の死」ではなく、反対に一部の研究者が言う単なる「絶望の死」でもなく、絶望と信頼の臨界において自分の死の意味を問いつつ亡くなる「謎の死」をイエスは死んだという。この点、評者もイエスがこのような臨界のうちに死んだとすることに賛同する。

こうした著者の解釈の独自性は、先に指摘したようにイメージ・ネットワークというイエスの「内側」にあるものをもとに史的イエスを再構成する点にある。従来の唯一性の原則によらず、周辺世界に類似の認められる記事も独自のイメージ・ネットワークにおいてまとめ上げ捉えたところに「史的イエス」の特徴を認めるとするのが新しい。しかしこのような著者のイエ

ス解釈について、その「内側」という主張に若干の疑問を感じる。著者は、キリスト教信仰の立場をイエスの「外側」として、イエスの内側を問題とするという。しかし「内側」をいかにして認識するのか。これを中心に以下三つのことを論じてみたい。

まず、著者が指摘するように、キリスト教にもイエスの「内側」についての議論がある。つまりイエスは自らを神の子と考えていたとされることなどである。しかし著者はこれをイエスの外側からなされたイエスの内側の解釈であるとする。これに対して著者は、「史的イエス」という概念装置を用いて自らの解釈をイエスの「内側」と同定する。疑問の第一は、著者の「内側」の議論もイエスにとつては「外側」になるのではないかということである。内と外という形式面で言うならば、著者の解釈もイエスの外側からなされたものであり、外側からイエスの「内側」として提示されたものではないだろうか。イエスの内側からの内側については、とくに逮捕後の沈黙と十字架での叫びについてその「内側」というものはイエス本人以外には謎であろう。

ボリス・ヴィアンというフランス人作家に「蟻」という短編がある。第二次世界大戦のおり、ある兵士が仲間とともに海岸警備にあたっていた。しかし途中、彼は砂浜に埋められていた地雷を踏んでしまう。足を離すと爆発することを知っているこの兵士は足を離すことができない。彼はまず仲間を離れ去るよう言う。こうして仲間が逃れてくれたところで、彼はどのようにすべきかを思案する。後ろに倒れるべきか、前に倒れた

ほうがよいか。前に倒れるならいのちは助かるかもしれない。しかし足のなのまま生きていくのは辛いだろうなどと想像が展開する。そのうちに足が痺れてくる（この痺れが「蟻」のこ）。こうして兵士は爆死してしまい、話は閉じられる。ここで語られているのは、この兵士の死が国家によって顕彰される「英雄の死」などではなく、実に他愛もない死であるということであり、その意図は外側から作られた死を批判することにある。その意味で、著者がキリスト教信仰の作り上げた神の子イエスの「覚悟の死」を外側として批判することも理解できる。しかし、このヴィアンの短編は物語であって、決して兵士というものがそのように死ぬと語っているわけではない。そもそもこれは具体的な兵士の話ではない。あくまでも英雄として「作られた死」への批判であって、実際の兵士の「内側」を再現しているわけではない。再現されているのは虚構としての内側であって、その意図は外側から「作られた死」への批判にある。同様にキリスト教信仰の立場から作られた「覚悟の死」というものがイエスの外側であるとの批判はよいとしても、しかし内側はどうかと言うならば、これこそ謎のままではないか。逮捕後のイエスの沈黙、そして十字架における叫びを解釈して、当惑、そして信頼と絶望の臨界における問いがイエスの「内側」であったと断ずるのは無理ではないか。「内側」それ自体は、外側からは（ましておおよそ二〇〇〇年後のわれわれには）謎にとどまる。誤解のないようにしたいが、評者はこれをキリスト教信仰の立場から述べているのでは決してない。人間の「内側」というものは謎であって、まずそれは具体的な交わりの中

でのみ確認できるものだと考えるからである。たとえば著者の解釈には、イエスという人間の一連の行動と言葉を「一つのもの」として解釈できるという前提がある。しかしそもそも生の人間がそのように一貫したものはかぎらない。この前提自体が福音書記者、あるいはキリスト教によるもの、あるいは一定の宗教的文脈に置かれたものではないのか。こうした一貫性自体が解釈上の一つの前提であるとすれば、もしキリスト教信仰や一定の宗教的文脈などの枠を外してしまうなら、忘却などさまざまな偶然と感情の動きのなかで人間の「内側」というものを謎だと言うべきではないだろうか。もっとも身近に感じる人ですら、他者として謎を秘めることは日常茶飯の経験のはずである。敢えて下らないことを言うならば、イエスは十字架上で痛さのあまり絶叫したのかもしれない。もとより一つの解釈としては成立しないこの推測も、また私自身も決してこのように思わないが、純然たる事実の可能性だけは認められるべきであろう。しかし、だからこそ福音書の描く「イエス」がわれわれの唯一の資料であることを確認したい。イエスの「外側」から「内側」を解釈する他はないのである。その意味で本書一五頁に見られる図表における第一象限というものは、自他の区別ができる者であれば誰にとっても謎にとどまるはずである。イエス本人以外は、外側から「内側」を解釈する他はないからである。

第二に、評者はいま指摘した図表の第一象限をイエス自身における「内側」としたが、この図表において著者は、キリスト教の外側にあってキリスト教成立以前のものをイエス自身の

書評と紹介

「内側」と同定している。この同定は「史的イエス」という概念の下に展開される。史的イエスを「内側」に定位して解釈しようとする点が著者のイエス解釈の特徴であった。しかし評者はこの点に疑問をもつ。先に述べたように、本来外側から見た内側と対置される「内側」とは、イエスの内側から見た内側のことである。ところが「史的イエス」を内側からの内側とするならば、とりわけイエスの沈黙と十字架の叫びについて、これは今日ではもはや謎にとどまる。たとえば、まったくの冤罪で殺人罪に問われた人が、検察側がその内的動機として提示するものに対して、弁護士に自らの内側を語ったという場合、その人の内側からの内側がまったく謎だとは言えない。なによりも「内側」として語った本人の証言がある。しかしイエス自身が書いたものは存在せず、キリスト教とは異なるものとしてイエスが語った内側の言葉が残されているわけでもなく、この点でわれわれの唯一の資料は、やはり「キリスト教」によるからである。そこで、著者の言う「内側」あるいは史的イエスは、内側からの内側ではなく、キリスト教成立以前ではあっても、外側からの内側ということにならざるを得ない。そして著者によるとキリスト教成立以前とはイエスの弟子たちの覚醒体験以前ということになる。それでは、具体的にそれはどこのことなのか。著者の主張するイエスの「内側」とは一体どこにあるものか。そしてそれが外側からイエスの「内側」として解釈し主張するものであるなら、キリスト教も同様のことを行ってきたはずである。またイエスの「心」というものを理解しようとする試みは、キリスト教思想史において頻出する主題の一つであ

る。しかし、誰かの「内側」そのものと、外側から「内側」として解釈され主張されるものとは異なる。

さらに第三は、イエスの絶叫に関わる。イエスの最後の言葉が「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」であるというのは、マルコ伝とマタイ伝のものであって、ルカ伝とヨハネ伝では異なる。もちろん評者はルカ伝とヨハネ伝を本当のイエスの最後の言葉だとは思わない。しかし同様に、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」もどこまでイエスに遡るか不明ではないか。なぜなら両福音書は続いてこれを「エリヤ」を呼んでいると人々が「誤解」したと記すからである。この誤解を解くという意図がそこには認められる。さらに最後イエスは「大声で叫び」息を引き取ったと書かれている。これが単なる声であったのか、それとも何かの言葉であったのかは不明であるが、両福音書ともその内容には関心を払わない。最後の叫びには関心を払っていないのに、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」を記しているとすれば、ここに何らかの意味を認めているからだとと言える。すなわちこの「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」自体はイエスの内側を記した言葉であるというよりも、一定の意図のもとに福音書記者が解釈して記したものだと言えな

いだろうか。この点はすでに佐藤研氏が指摘したことであり（『福音と世界』二〇〇四年五月号、二四—二五頁）、著者はこの言葉ではなく、叫んだということが重要であると応えていた（『福音と世界』二〇〇四年十月号、五四頁）。しかしこれを「叫ぶ」という行為に限ってみても同様だと思われる。

評者は、ここでイエスの「内側」という議論を展開する必然

性に疑問を感じる。著者が述べるように、ヨブのような問いを発したのであれば、まさにそのように福音書記者が意図してイエス像を描いたと考えられるのではないか。この点「謎の死」というものが、著者が内側として解釈したものであるように、である。そもそも苦難と叫びは、義人のしるしではなかったか。これは、福音書との関連を度外視するなら、たとえばヘブル書では従順の証としてキリストがメルキセデクであることを述べる箇所に見られる。「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ……、多くの苦しみによって従順を学びました。そして完全な者となられたので……」（五章七節から八節）とある。こうした仕方で義人や大祭司の姿を捉える思想の存在が想定されるなら、この叫びをヨブのような信頼と絶望の臨界における叫びとして福音書記者が描いた可能性も否定できないと思われる。

以上、三つの疑問を述べてみた。先に断ったように、この論評は本書に見られる著者のイエス解釈に集中したものであって、いささか偏っている。本書全体については、すでに著者自身が本書の「はじめに」のなかで的確にまとめていることを付記しておくきたい。

最後に、先ほどイエスの「内側」とはこのことなのかと問うたが、評者に思い当たるものがないわけではない。もともとかなり変化球の推測になるので恐縮なのだが、それは「大学」という場所ではないかと考えている。今日大学でキリスト教を論じることには至難であって、従来の神学や教会的前提を払拭し

て根本から考え語る勇氣をもたなければ、到底不可能である。これは、一般学生を前にするとき日頃より評者自身が痛感することである。著者の言うキリスト教の外側とはこのような次元で捉えることもできるのではないか。著者の解釈は、大学で語るにふさわしい言葉と論理で貫かれていて、この点評者は多いに共感を覚え、また敬意の念をもつ。前著と同様に本書はこの課題を見事にやり通しているからである。またなぜアガンベンやベンヤミンなのかもここから理解できる。もとよりこれは評者の勝手な憶測に過ぎない。それでもこの点で評者は、大学や研究という場所で「イエス」について考え語るために本書は必読の書であると考ええる。